
はじめに

佐久間淳一

名古屋大学大学院文学研究科副研究科長・教育研究推進室長

文学研究科には、8年前から、文学部・文学研究科における教育・研究のあり方を長期的観点から検討することを目的に教育研究推進室が置かれています。本室の具体的な活動としては、①大学院生のフィールド調査に対する支援事業（フィールドワーク調査実習プロジェクト）、②大学院の共通科目の拡充、③ワークショップの開催の三つがあり、その内容は、毎年刊行している本年報『メタプティヒアカ』に掲載の通りです。

今年度の本室の活動ですが、御覧のように、ワークショップにつきましては、あまり開催することができませんでした。ワークショップは、文学部・文学研究科の教育・研究に関わる問題について、学内外の話題提供者から貴重な助言を得る機会であり、本来、もっと開催されていなければならないものではありませんが、半面、年数の経過と共に、マンネリ化が進み、また、出席者はいつも同じ顔ぶれで、せっかくの機会が生かされていない現状があることも事実で、来年度に向けて、何とか打開策を考えなければならない段階に来ていると思います。

一方、ワークショップを開けなかった代わりと言っては何ですが、今年度は、教育研究推進室会議をほぼ2週に1回のペースで開催し、文学部・文学研究科が抱える教育・研究上の問題について議論を深めることができました。今年の4月には、21世紀COEおよびグローバルCOEにおけるテキスト学研究成果を受け継ぎ、全国でも稀なテキスト学の研究拠点を維持発展させていくために、人類文化遺産テキスト学研究センターが発足する予定ですが、この新しいセンターの構想も、今年度の教育研究推進室における議論が具体的な形となったものです。来年度後半には、G30国際プログラム群「アジアの中の日本文化」プログラムがスタートしますが、G30プログラムとともに、この新センターの発足が、文学部・文学研究科における教育・研究の発展につながることを期待しています。

教育研究推進室で行った議論では、その他にも、長年の懸案だったTAやRAの活用に一定の方向性を打ち出すことができましたし、ポストの運用も含めて、教育研究組織の将来的なあり方についても議論を深めることができました。もっとも、教育研究組織の将来的なあり方については、大学全体の将来構想とも関わるために、平成22年度に総務委員会のもとに設置された「学位プログラム検討ワーキンググループ」や23年度にかけて実施した教員懇談会における議論が未だ実を結んでいないのが実情で、この問題については、来年度も継続して議論していかなければならないと考えています。